

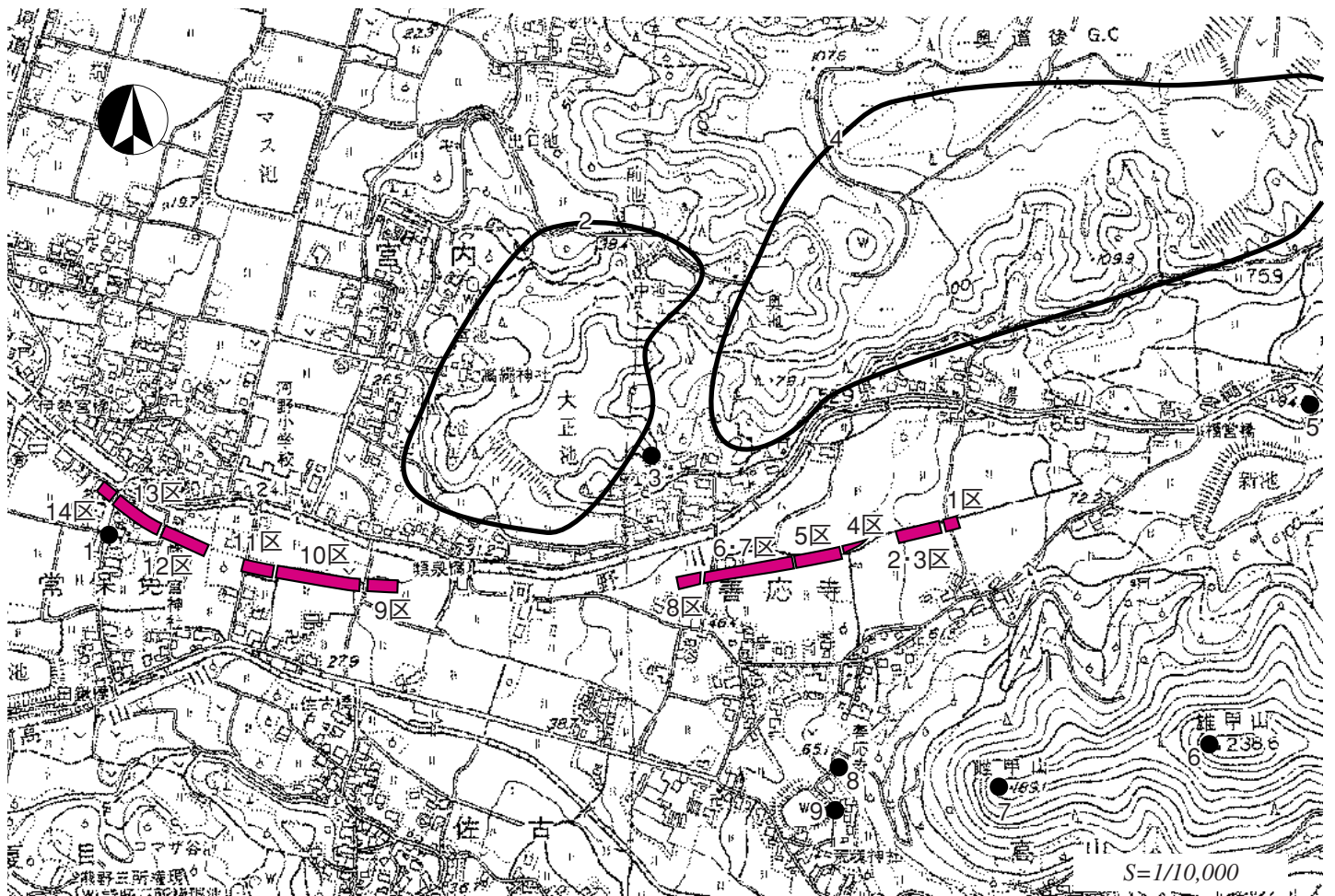
だい そう いん いせき べつぷ いせき
大相院遺跡・別府遺跡(仮称)



6区出土の斜縁鏡
(2世紀後半から3世紀初頭の中国の鏡)

事業名 県道湯山高縄北条線埋蔵文化財調査
委託者 愛媛県(松山地方局)
受託者 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
遺跡名 大相院遺跡・別府遺跡(仮称)
場所 愛媛県北条市善応寺・常保免・別府

調査区及び周辺の遺跡位置図



1区～11区 大相院遺跡 12区～14区 別府遺跡
1 茶臼権現礎石 2 辻の内古墳群 3 善応寺経塚 4 地藏堂古墳群
5 観音堂遺跡 6 雄甲城跡 7 雌甲城跡 8 善応寺遺跡 9 河野館跡

本遺跡は、北条市善応寺・常保免・別府に位置します。高縄山より派生する比較的大きな谷の緩斜面及び谷の中央に流れる河野川の左岸に遺跡は立地し、日照条件も比較的好く、西に大きく開く谷は斎灘を臨みます。調査区は1区から11区までを仮称ではありますが大相院遺跡とし、12区から14区までを別府遺跡とよんでいます。

善応寺地区は、河野氏発祥の地といわれており、5・6・7区は小字名から14世紀後半に河野氏が創建した旧善応寺関連の遺構の検出が期待されましたが、遺跡全体の削平もあり、確実といえる成果はありませんでした。しかし、河野氏が善応寺地区で力をつけ、西進し常保免・別府を開発してゆく12世紀から13世紀の遺物や、松山市の道後湯築城に拠点を移し、発祥の地である河野郷土居館を善応寺として再開する14世紀の遺物が数多く出土しており、特に7区から出土した龍泉窯系劃花文青磁碗と石製風字硯及び短刀は、当時の河野氏の力を示すものと考えられます。また、後述する13区出土の木簡は、河野氏と四国遍路とのつながりをうかがわせるものではないでしょうか。

7区と8区は弥生時代前期末から中期初頭にかけての袋状土坑や方形の土坑があり、住居跡は検出されていません。袋状土坑は貯蔵穴と考えられているので、この時期ここでは、集落の中での貯蔵区画と住居区画が区別されているのではないかと考えられます。

また、5区から8区にかけては弥生時代後期後半から終末期にかけての集落を形成する竪穴住居跡や柱穴・土坑などが数多く検出されました。特に竪穴住居跡のほとんどが、遺物の量も少なく、ある程度片づけてあるかのような感じに観察でき、その内の約半数の竪穴住居跡の隅から鉢が出土し、この集落特有の住居の廃絶のマツリを意味しているのではないのでしょうか。遺物としては、5区の自然流路内から、大量の土器が出土し、かなり一括性があるため今後期待される資料になると考えられます。

また、同じ自然流路内から、土器とともに重圏文系小形前漢鏡(中国製)と考えられる鏡の破片も出土しました。破断面を観察すると研磨の痕跡がみられることから、破鏡と考えられます。6区からは中世の層ではありますが、斜縁鏡(中国製)も出土しており、この鏡は銘文が2字残存しています。1字は「長」もしくは「君」と読める可能性があり、もう1字は「宜」と読み取ることが可能です。斜縁鏡は愛媛県内では、松山市の文京遺跡、朝日谷2号墳及び大西町の妙見山古墳から出土しています。

この2枚の鏡の出土が意味すること、また、竪穴住居跡があまり荒らされていない状態で検出できたことから、当時かなりの有力者がこの地を治め、中央の写真(調査場所遠景)のように田畑を作り、安定的に生活を営んでいたと想像できるのではないのでしょうか。



5区自然流路の遺物出土状況

調査区	弥生時代前期末～中期初頭	弥生時代後期後半～終末	古墳時代後期	古代	中世
1区		集落			
2区		集落			
3区		集落			
4区					不明(溝状遺構・土坑・柱穴)
5区		集落			不明(溝状遺構・土坑・柱穴)
6区		集落	横穴式石室		不明(溝状遺構・土坑・柱穴)
7区	集落?	集落			不明(溝状遺構・土坑・柱穴)
8区	集落?	集落			
9区			集落	官衙・寺院・有力豪族の居館関連	集落
10区			集落	官衙・寺院・有力豪族の居館関連	集落
11区	集落?		集落	官衙・寺院・有力豪族の居館関連	集落
12区				官衙・寺院・有力豪族の居館関連	集落
13区				官衙・寺院・有力豪族の居館関連	集落
14区					集落

調査区一覧表

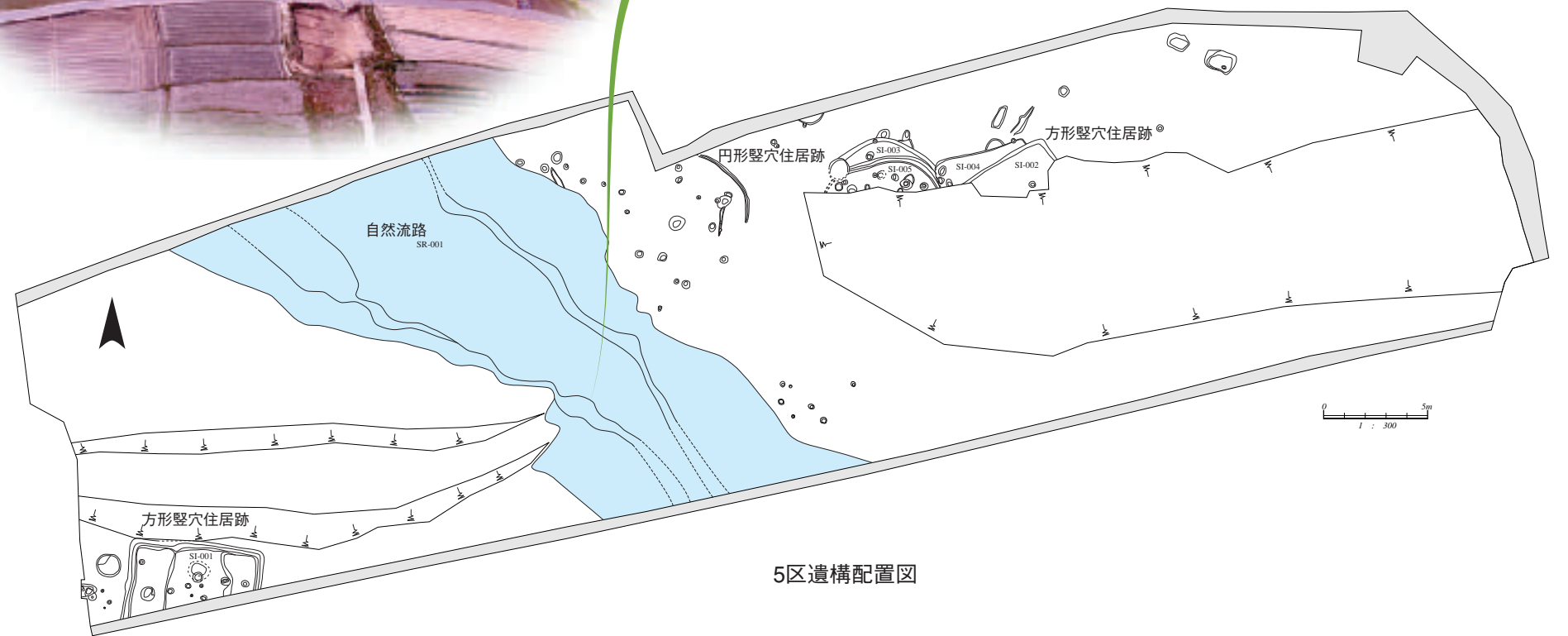


7区の龍泉窯系劃花文青磁碗と石製風字硯と短刀の出土状況

5区自然流路出土の重圏文系小形前漢鏡の破鏡

破鏡ってなに？

鏡を破碎した後、破断面を磨いたもの。使用目的は、マツリの道具とか有力者の権力の象徴と考えられています。破鏡に穴をあけ、ペンダント的に使用したと考えられるものもあります。



5区遺構配置図

9区から13区からは古代の土坑と、掘立柱建物跡などが検出されました。特に12区の土坑からは、赤色塗彩の大型の皿と鍛冶に使用する鞆の羽口が出土しましたが、周辺には鍛冶の痕跡を見つけることができませんでした。出土した羽口も、あまり使用した痕跡がないことと、自然流路内から、まとまった数の古代の瓦が出土したこと、周辺に茶臼権現礎石があることから考えると、当時、周辺に寺院・官衙、もしくは有力豪族の居館があり、鞆の羽口と赤色塗彩の皿が何らかの鍛冶にかかわるマツリに使用され、その後、埋められたのではないかと考えられます。

13区からは、井戸遺構が4基検出されました。出土した土師器の杯や皿から、どの井戸も年代的には14世紀後半から15世紀前半になります。また、その井戸のうち2基(SE-001・SE-004)から木簡が3本出土し、1本(SE-004出土)は赤外線照射することにより、文字が書かれていたことがわかりました。

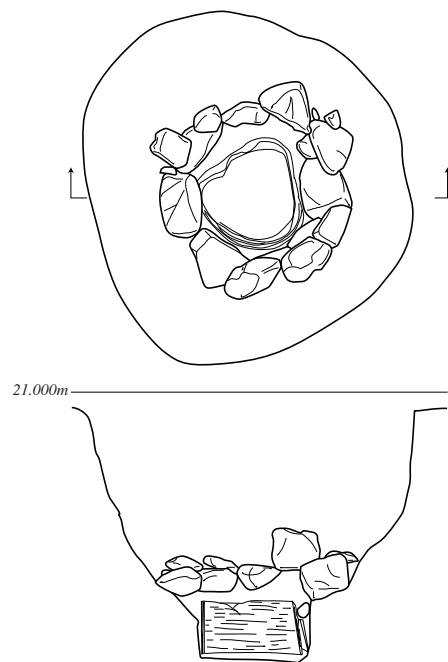
「迷故三界城 悟故十方空」

南無〇伽用

「本来無東西 何処有南北」

南無〇〇〇〇

一部判読できませんが、「迷故三界城 悟故十方空」「本来無東西 何処有南北」はお遍路さんの菅笠に書かれている文字と同じです。この木簡の出土状況から、おそらくこの井戸では、廃絶に伴うマツリが行われたのではないかと考えられます。



13区の井戸の平・断面図
(SE-004 S=1/40)

コラム

衛門三郎伝説

弘法大師に関するさまざまな伝説・伝承の中でも有名な話が衛門三郎(えもんさぶろう)伝説です。この話によると、四国遍路を始めた人物は衛門三郎ということになります。では、どのような話が簡略に述べてみましょう。以下『巡礼・遍路～こころと歴史』(大法輪閣)の中で稲田和子さんが書かれている「四国の弘法大師伝説」より引用いたします。

「むかしむかし、伊予の国(愛媛)に衛門三郎という大けなお百姓がおったそうな。秋のある日、汚いお坊さんが門に来て、鈴を鳴らし、『食べ物をください』と言うて鉢をさし出したそうな。ところが衛門三郎はけちな男で、断った。それでも坊さんは、何べんも来るんで、八へんめに衛門三郎が、『ひつこい坊主め、去ねというのわからんか』と怒って鉢を投げつけたもんだから、鉢は落ちて八つに割れたそうな。

ふしぎなことに、その翌くる日、衛門三郎のいちばん上の子が急に病気になってぼっくり死んでしもうた。衛門三郎は泣き悲しんどった。そしたら、その次の日には二番目の子が、これまたわけのわからん病気になって急に死に、またまたその次の日、3日めには三番目の子が急死し、衛門三郎は八人の子持ちだったのが、一日に一人ずつ死んでいって、とうとう八人おった子が皆、死んでしもうた。

あまりのことに、衛門三郎はたいそう嘆き悲しんで、寝こんでしもうとった。ある日、弘法大師が夢に姿を現されて、『お前がしてきたことを悔い改めて、情深い人になれ』と言われたそうな。衛門三郎は、先日の乞食みたいな姿の坊さんは弘法大師だったと、やっと気づき、すぐさま四国巡礼の旅に出たそうな。

四国を20何べんか廻って、阿波の焼山寺の前で倒れとった時、すぐそばに声がして、『衛門三郎よ、これでお前の罪は消えた。お前の命もこれまでじゃが、何か望みはあるか』と言う方を見たら、お大師さまが立っておられたそうな。『ありがとうございます。子どもは皆死に、望みは何もありませんが、後生は大名に生まれ変わりたいと思います。そしたら今度こそ人のために尽くします。』と言うた。

お大師さまは望みをかなえてやろうと、小石に梵字(ぼんじ)を書き、衛門三郎の手ににぎらせたそうです。やがて衛門三郎は息を引き取ったということです。その後、伊予の河野家に男の子が生まれたが、右手に石をにぎっていたそうです。この石を納めたお寺を石手寺(松山市)と呼ぶようになったということです。

庶民のお大師信仰による四国遍路の原型が見られる興味深いお話です。みなさんは、このお話をどうお思いでしょうか。